

故 岡田啓治の功績

岡田啓治氏(医学博士)は、1945年(昭和20年)4月19日に長野県長野市に生まれ、長野県立長野高校を卒業し、早稲田大学政治経済学部に入學、卒業後は株式会社ビクターに就職されました。その後、1981年に聖マリアンナ医科大学医学部医学科を卒業し、1982年4月に長野市西鶴賀町の岡田内科を義父より継承しました。

かかりつけ医としての地域貢献として、40年弱にわたり地域の住民の疾病1次予防および2次予防に貢献しただけでなく、内科医・漢方専門医として3万人以上の患者を治療してこられました。患者層は小児から高齢者まで幅広く、医療面だけでなく仕事のことや家族の悩みにも積極的に耳を傾け、まさに「赤ひげ」そのものであったと思います。温厚で患者に寄り添う姿勢に、長野市内だけでなく長野県内の広い範囲から遥々受診する患者も多くなりました。また、有床診療所として、東京都墨東病院などで培った救急医学の知識や技術をもとに急性疾患で受診した患者に入院してもらい治療を行っていました。中には夜通しで病態を観察し徹夜をすることもしばしばあったということです。

高齢者介護を通じた地域貢献として、1995年7月に介護老人保健施設「コンフォート岡田」を50床にて長野市北長池に開所しました。当時はまだ介護施設がそれほどなく、地元住民からの建設に対する反対の意見も多かった時代でした。氏は、地元住民ひとりひとりに、介護施設の必要性、介護施設とはどのようなものか、住民への安全面での配慮など、心を込めて粘り強く説明を繰り返し、建設承諾に至った経緯があります。開所後は介護に疲弊した家族のレスパイトのために一時的な入所を勧めたり、フレイル状態にある高齢者のリハビリテーション目的に入所を勧めたり、今では当たり前になっている高齢者介護の在り方を先進的に取り入れ追求していきました。このような地道な活動により、地元住民も徐々に後援して下さるようになり、また入所希望の家族の要望も強かったため、2002年12月にベッド数を50床から150床に増床しました。介護老人保健施設には常勤医師がいたにも関わらず、昼夜問わず高齢者150人の回診や救急対応などを毎日行っていました。岡田内科かかりつけで入所した方々からは「先生に会えることが一番の薬」と皆、口々に言っていたようです。2005年11月には短期入所型48床を増床し、介護老人保健施設としては長野県内最大規模となる198床となりました。高齢化が進む中、脳血管性認知症、アルツハイマー型認知症など認知機能障害を呈する疾患が増加したため、一部を認知症専門棟に転換し現在に至っています。

有床診療所や介護老人保健施設は治療やリハビリテーションを行い、基本的に在宅復帰を目指す施設です。氏は、変わりゆく家族の在り方や個人の生き方をいち早く察知し、2011年12月に長野市の支援を受けて、社会福祉法人を設立しました。地域密着型特別養護老人施設29床、短期入所施設16床を開所し、そこでは入所者が個人の尊厳を保持しつつ自立した社会生活を営むことを支援でき、また終の棲家として最期を看取ってもらえることができる体制づくりに尽力しました。医療・介護・看取りという地域医療および介護に不可欠なものを着実に構築していった氏の功績は大きかったと思われます。また、社会福祉法人では長野市の委託事業となる包括支援センターを西鶴賀エリアと北長池エリアの2箇所で開催し、独居高齢者や孤独死の問題に直面し、独居高齢者を受け入れる2つのサービス付き高齢者住宅を開設しました。そこでは様々なクリエイションや教室、講演等が行なわれ入居者の日常生活を豊かにする取り組みを積極的に実施しました。

長野市医師会や長野県医師会で多くの役職を歴任し、長野県医師会副会長として地域医療の在り方や医療体制の構築に大きく貢献した。産業医や校医としての社会貢献活動として、国土交通省長野国道事務所、国土交通省千曲河川事務所、長野県警長野中央署、長野市社会事業協会などの官公庁の他、10社以上の産業医契約を締結し、職場環境の巡視や健康管理、ストレスチェックなど延べ数千人の労働衛生管理に尽力しました。氏が行った長野市内での死体検案の数は100件を超えており、多くの社会貢献活動に対して感謝状を授与されました。また長野市立安茂里小学校、長野栄養専門学校、妻科保育園などで校医として長年従事し、多くの学生や児童の健康管理に尽力しました。

以上のように、岡田啓治氏の地域医療や介護事業としての業績は卓越しており、長野県内外に大きく貢献する代表的な医療者として高く評価されており、さらには、産業医や校医、県医師会や市医師会での社会貢献活動においても著しく活躍されておりました。岡田啓治氏の功績は誠に顕著でありました。